
面影

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

面影

【Nコード】

N8399F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

入学式ではじめて見てからその女の子が好きになった。けれど彼女をどうして気に入ったのか。そのことに気付いたけれど。男の子の立場から書いた恋愛ものです。

第一章

面影

好きになったのは。本当に単純な理由からだった。

「可愛いな」

こう思った。本当にそれだけだった。

その娘高見純は唇が赤く大きく目がはつきりとして大きい二重だつた。黒い髪は長く肌はきめ細かく和紙の様な色だつた。性格も明るくクラスでもよく目立つ美人だつた。

若村智哉が彼女に声をかけたのはそんな彼女が可愛いと思つたからだ。その声のかけ方も彼自身が考えてもかなり自然であつさりしたものだつた。

「今日の放課後さ」

「あつ、確か」

「若村だよ」

明るく笑つて彼女に名乗つた。ここでもはじめて声をかけたとは思えない程あつさりとした調子で彼女に答えられたのが自分では不思議であつた。

「若村智哉っていうんだ」

「若村君ね」

「ああ。同じクラスだね」

まだ四月の中旬だ。だからクラスメイト全員の顔を覚えているわけではなかつたのだ。これは智哉にしるそうだしどうやら純にしるそうであるようだつた。

「確かそうだつたわよね」

「そうそう。知ってる？」

「悪いけれど知らなかつたわ」

純は明るい調子で彼に言葉を返してきた。

「そうだったの。同じクラスだったの」

「ああ。それでさ」

知られていなかったのには少し落ち込んだがすぐに立ち直ってまた彼女に声をかけた。

「今日の放課後時間あるかな」

「まあ一応は」

純は少し考えてから智哉に答えた。この時彼はちらりと純の全身を見回した。赤いブレザーと黒いスカート、ネクタイのその制服はかなり派手でスカートも短い。どうやらスカートは女の子がめいめい上に織り込んでいるようだった。そのせいでかなり目立つ格好になっいてその短いスカートから見える純の脚も制服から浮き出ているスタイルもかなり見事なものだった。それが智哉の青い詰襟とコントラストを為していた。

「あるけれど」

「それだつたらさ」

彼は時間があると聞いて一気に攻勢に出た。

「面白い場所があるんだけど一緒に行かない？」

「面白い場所？」

「うん。駅前のね」

純が興味を示したのを見てさらに攻勢を強めた。

「ハンバーガーショップだけれど」

「ああ、あそこね」

そのことは純も知ってるようだった。

「あそこがどうかしたの？」

「あそこ凄く安く安くてしかも美味いんだよ」

にこりと笑って純に言うのだった。

「だからさ。一緒にどう？」

「そんなに美味しいの」

「しかも量もかなり多いんだよ」

話を聞く限りいいこと尽くめの店だ。

「どうかな。それで」

「そうね。一つ聞いていい？」

「何？」

「そのお店ダブルチーズバーガーあるかしら」

彼女が聞いてきたのはこれであった。

「ダブルチーズバーガー。どうかしら」

「ああ、あるよ」

智哉はすぐに答えた。これについては彼はよく知っていた。何故ならそのダブルチーズバーガーを食べたことがあるからである。

「美味しいよ、それもありね」

「そうなの。あるの」

「ダブルチーズバーガー大好きなんだ」

これは本当のことだ。実は智哉はハンバーガーの中でダブルチーズバーガーが一番のお気に入りなのだ。これは昔からである。

「だから。真っ先にチェックしたよ」

「そうなの。それだったら」

「行くんだね」

「ええと」

だがここで純は少し返答に時間を置いてきたのだった。

「若村君だったわよね」

「うん、そうだよ」

その時間を置いた理由は彼の名前を思い出していたからであった。

「若村智哉。覚えておいて」

「わかったわ。それで若村君」

「うん」

にこりと笑って純に応える。

「何かな」

「そのお店。一緒に行つていいかしら」

「だから誘ってるんだけど」

「そうよね。それだったら」

「二人でダブルチーズバーガー食べようよ」

「そうね。じゃあ一緒にね」

話が決まった。ダブルチーズバーガーが決め手となったのだった。こうして智哉は純を誘い出すことに無事成功したのであった。

第二章

「行こうね」

「ダブルチーズバーガーに」

ここで純はさらに言うのだった。顔は満面の笑顔になっている。

「飲み物はコーラね」

「コーラもちゃんとあるよ」

「いいわね。その二つがないとハンバーガーじゃないわ」

「ハンバーガーじゃないんだ」

「私はそう思うわ」

「ふうん、そうなんだ」

智哉は今の純の話を聞いて何故かデジャヴーを感じた。しかしどうしてそれを感じたのかはぼんやりとでもありわからないのであった。

「まあそうだよな」

「じゃあ放課後にね。待ち合わせは」

「学校の門の前でね」

「そこでね。遅れたら駄目よ」

「遅れないよ、絶対にね」

自分から誘って遅れるわけにはいかなかった。この辺りは真面目に考えている智哉であった。

何はともあれこれがはじまりだった。智哉は純と付き合いだした。周りからは早いうちに可愛い娘をゲットしたとあれこれ言われることになった。

「おいおい、やるじゃねえか」

「御前意外と手が早いんだな」

「早いって何なんだよ」

この時彼は男友達と一緒に昼食を食べていた。食べているのはそれぞれの弁当である。

「だってよ。純ちゃんって最初から人気だったんだぜ」
「綺麗だしな」
「そうだな。綺麗だよな」
「智哉もそれは認める。」
「性格も明るいしな」
「ちよつと騒がしいけれどな」
「悪い娘じゃないよな」
「ああ、確かにな」
「それもまた認める智哉だった。」
「一緒にいて楽しいな。いつもな」
「余計に羨ましいな、おい」
「そんな彼女と一緒にだよ」
「ただな」
「だがここで彼は言うのだった。」
「どうも引つ掛かるものもあるんだよな」
「引つ掛かるもの？」
「あいつダブルチーズバーガー好きなんだ」
「まず言うのはこれであつた。」
「それとコーラがな」
「ああ、駅前のハンバーガーショップな」
「あそこのだよな」
「それとラーメンは豚骨」
「彼は純のラーメンの好みも述べた。」
「うどんは鳥なんばだな」
「うどんもか」
「お菓子はドーナツが好きだしな」
「なおどの店も駅前にあるのである。」
「お好み焼きは大阪が覇府だ。こんなところだ」
「随分と二人で食べ歩いているんだな」
「それもかなりな」

「否定はしないさ」

友人達の今の突っ込みはあえて正面から受け止めたのだった。

「何かデートっていえば二人で食べているしな」

「けれどデートはもうしているのか」

「一応はな。ただな」

しかし智哉の顔に微かに困ったものが混ざったのだった。

「仲は進んでいるけれどな。キスはまだなんだよな」

「ははは、そりゃそうだ」

「そう簡単にそこまで行くか」

これは友人達にすぐに笑い飛ばされてしまった。

「キスっていつでもそう簡単にはいけないさ」

「ましてやベッドまではな」

「簡単じゃないか」

実はこうしたことには疎い智哉であった。だから友人達が笑ったのをそのまま受けてしまったのである。顔も少し惚けた感じになっている。

「それは」

「当たり前だろ。まあ純ちゃんがどんな娘か知らないぜ」

「俺達は可愛いつてだけしか知らないからな」

「ああ」

友人達はこう前置きしてきた。

「それでもな。大抵の女の子はな」

「ガードしてるんだよ」

「ガードか」

「高校一年だぜ」

友人の一人は学年についても言及した。今彼等は花の一年生というわけである。先輩からはきき使われるが初々しい年頃である。

「経験もまだだろうしな」

「キスもか」

「だって御前もまだだろ？キス」

「まっ、まあそれはな」

戸惑いつつこの質問に答えた。実はその通りだ。彼はキスもまだなのだ。

「ただだけれどよ」

「俺もだしな」

「俺もだ」

何とそれは友人達も同じであつた。これには智哉も驚いた。それですぐにそのことを彼等に対して突っ込むのであつた。突っ込むにはいられなかつた。

「ちよつと待て、御前等もかよ」

「あのな、そうおいそれと中学生で経験してるか」

「幾ら何でも早いだろ」

「早い」

「中にはやつてる奴もいるだろうけれどな。最後までな」

「それでもだ」

彼等の言葉はかなりの割合で自己弁護になつていた。それでもあえて言うのであつた。

「普通はないからな」

「俺達一応普通だしな」

「普通はか」

「何度も言つが純ちゃんがどうかはわからないぜ」

このことがまた話に出る。

「しかしな。普通はまだキスもまだだろ」

「そしてはじめてはだ」

ここからの話は智哉もよくわかるものであつた。

第三章

「誰でも警戒するよな」

「ああ」

だからすぐに頷くことができたのだった。

「そういうことだよ。だからまだなんだよ」

「それにだよ」

彼等はさらに智哉に言ってきた。

「付き合つてまだ二ヶ月かそこらか？三ヶ月か？」

「三ヶ月だよ」

流石に付き合っている本人だけあつてどれだけ経つたのかはきちんと把握していたのだった。

「四月に声かけてだからな」

「御前本当に手が早いな」

「とんでもない奴だ」

四月ということを再認識した二人の多少意地の悪い突込みが入ったがこれはほんの一瞬だった。

「まあそれはいいとしてだ」

「いいのかよ」

「とりあえず今の話の本題じゃないからな」

「話戻すぜ」

こう言つて彼等のペースで話を戻してきた。話しながらコーラを飲む。今彼等は街の自動販売機の前でそれぞれコーラを飲みながら話をしているのである。

「まあ三ヶ月だよな」

「ああ、そうだけれどな」

「それ位じゃキスまでは普通はいかないな」

「高校生だとな」

「そんなものか」

智哉は彼等の言葉を聞いて納得できたようなできないような顔になつて首を傾げさせた。

「キスまで二時間胸まで五時間つて歌があつたけれどな」
「随分古い歌だな」

友人は今の智哉の言葉に少し呆れた顔になつた。

「そりや遊び人の歌じゃなかったか？」

「確かそうだったな」

彼も記憶を辿つてそれに頷いた。

「この歌は。確か」

「だったら参考にはならないぜ」

「あとエロ漫画とかもだぜ」

友人達はコーラ缶片手に話を続けていく。

「あんなの殆どじゃなくて完全にファンタジーだからな」

「歌にしるそうだぜ」

歌についてまた言われた。

「そうそう上手くないさ」

「それはつきりとわかつておけよ」

「漫画や小説もか」

「当たり前だろ」

「本物は創作とは違うんだよ」

これがさらに強調される。智哉は二人の話を聞いて今まで自分が抱いていた恋愛に関する考えがかなり幻想的なものだと思ひ知らされたのであつた。そしてそれは顔にも声にも出てしまつていた。

「ううむ」

「呻くな呻くな」

「別にそんな必要はないからな」

そしてこれもすぐに二人に突つ込まれたのだつた。

「現実には甘くないつてことだ」

「そういうことだよ」

「そう考えればいいんだな」

「ああ、そうさ」

「わかつたら焦るな」

今度は焦るなと言われた。釘を刺すようにだ。

「いいな。絶対にだ」

「まずこの三ヶ月順調だったと思うんだな」

「順調か」

「だってあれだぜ」

「なあ」

二人は顔を見合わせそのうえで彼に言ってきた。

「コクってオツケーだったんだろ、最初は」

「ああ」

その通りだった。まず最初の滑り出しは上々だったのだ。

「それから何度もデートしてるよな」

「食ってばかりだけれどな」

「食えば食う程いいんだよ」

「実際のところはな」

キスもまだだというのにやけに詳しい二人であった。何故かはわからないが。

第四章

「三ヶ月もたないカップルだっているんだぜ」

「それを考えたらな」

「そういうものか」

「それ考えたら順調だよ」

「全くだ」

友人達の言葉に今度は羨望が入った。

「いいよな、あんな綺麗な娘と付き合えて」

「それも順調にな」

「何か俺が幸せみたいない方だな」

今の智哉の言葉は自爆だった。しかもかなりの。

「馬鹿、幸せじゃなくて何なんだよ」

「御前ちよつとは自分を振り返れ」

早速友人達から怒りの言葉が来た。そしてそれはヒートアップするものだった。

「あのな。そもそもあんな綺麗な娘な」

「しかも性格は明るくて中々いいし」

「俺言われっぱなしだな」

「じゃあ殴ろうか？」

「悪いが容赦はしないぞ」

言葉は半分は本気だった。羨望がやつかみになりそれがさらに妬みに変わろうとしていた。流石の智哉もそれを見て流石に言葉を止めたのだった。

「そうだな。それはな」

「わかればいいんだよ」

「わからねえと容赦しねえ」

当然今の二人の言葉も羨望から来るものである。

「しかし。確かに綺麗な娘だけれどな」

「どうしてまた」

「今度は何だ？」

友人達に問い返す。

「言葉の調子が変わってきたみたいだけれどな」

「うちのクラス可愛い娘多いよな」

「学校全体がな」

かなり羨ましい学校である。美人が多いということはそれだけで幸福な場所にいるということだ。そうした意味で彼等はかなり幸せであると言える。

「とにかくだ。それでも何であの娘なんだ？」

「綺麗だからか？やっぱり」

「まあそうだけれどな」

言われてそれに頷くのだった。だがまだ言葉はあった。

「ただ。何かな」

「何か？」

「どっかで見たようなな。気がしたかな」

目を上にしてそのことを考えるのだった。

「どっかうけかわからないけれどな」

「どっかで見たような？」

「ああ、何となくな」

また彼等に対して答えた。

「そんな気がするんだよ。今気付いた」

「今気付いたっておい」

「あの娘に感じる場所があつたのか」

「その感じるところに従ったってどこか？」

自分で自分に問い掛けながらの言葉だった。

「あの娘にコクつたのはな」

「どっかで見たようなか」

「それって何なんだよ」

「いや、俺にもわからないんだけれどな」

今の問いにはこう答えるしかなかった。それしかなかった。

「そこところはな」

「言ってる意味がわからねえぞ」

「御前何が言いたいんだよ」

また友人達の突込みが彼に炸裂した。しかしそれでも彼はわからないといった顔であった。

「御前がわからないで誰がわかるんだよ」

「いい加減だな、おい」

「ダブルチーズバーガーにしる豚骨ラーメンにしるな」

話が食べ物ものに戻った。

「どつかで聞いたようなな。そんな気がするんだよ」

「まあ御前にわからないのならな。俺達があればこれ言ってもな」

「仕方ないからな」

「そうだよな。とにかくな」

「頑張れ」

彼等の言葉はとりあえず智哉へのエールで終わったのだった。

「俺達が言えることはそれだけだ」

「応援はするぞ」

「悪いな。しかしあの娘の食べ物にしる」

友人達の応援を受けながら食べ物についての考えを続ける。

「何か引っ掛かるな。本当に何なんだろうな」

そのことも考えたがそれはすぐに忘れた。家に帰るとその日の夕食はラーメンだった。母親の手作りのラーメンであった。

第五章

「やっぱり豚骨なんだよなあ」

「悪い？」

目の前に出されたその白いスープのラーメンを見て言うとともに母親が声をかけてきた。唇が赤く大きく目がはつきりとして大きい二重である。黒い髪は長く肌はきめ細かく和紙の様な色をしている。目の両端の皺が気にはなるがそれでも美人であると言える顔立ちであった。この人が智哉の母親なのである。今でも彼の父は彼女を美人だともてはやしている。恋愛結婚で今でもその時の熱い気持ちはそのままの夫婦だ。

「豚骨で。カルシウムがあつて身体にいいのよ」

「それは何度も聞いてるよ」

「わかつたら早く食べるの」

母は少し厳しい声で智哉に言ってきた。テーブルにいるのは二人と智哉がそのまま歳を取ったような顔の父親がいる。ついでに母親そっくりの妹までいる。

「いいわね」

「わかつたよ。けれどお母さんっていつも豚骨だよな」

「だって美味しいじゃない」

「今度の言葉はこうだった」

「ラーメンっていえば豚骨。これじゃないと食べた気がしないわね」

「本当に好きなんだね。それにうどんは」

「鳥なんばだよな」

父親がここで言った。席は智哉と向かい合っている。

「お母さんの好みはね」

「そうよ。流石お父さん」

夫に言われて気分がよくなったようだった。やはり今でも熱い。「わかつてくれてるじゃない。私のことを」

「だってお母さんのことだから」

笑って妻に応えていた。

「わかるよ。何でもな」

「うふふ。あとカレーはね」

「チキンカレーだね」

「それが一番よ」

この家ではチキンカレーばかりである。お母さんが料理を作る為そのメニューは自然とお母さんに決められるのだ。その結果家のカレーはいつもそれだ。

「美味しいし栄養もあるしね」

「ビーフカレーは？」

「あれもいいけれどね」

娘の言葉も否定はしない。否定しないだけだが。

「やっぱりカレーはチキンよ。本場インドだってそうだし」

「インドのカレーは日本のとは違うらしいけれど」

「智ちゃん、五月蠅い」

早速母親に注意される智哉であった。

「お母さんが本場と言ったら本場なのよ」

「そうだぞ、智哉」

しかもこれにお父さんが同調するから始末が悪かった。お父さんはお母さんにぞっこんで家事のことなら何でも唯々諾々なのである。

「お父さんの言うことは聞かなくてもいいからお母さんの言うことは聞け。いいな」

「普通逆なんじゃないの？それって」

目を顰めさせて逆にお父さんに聞き返す。

「お父さんの言うことは聞けってなるんじゃないのか？こういう場合」

「何言ってるのよお兄ちゃん」

新たに参戦してきたのはこれまたお母さんに生き写しの妹だった。智哉にとっては非常に生意気で小憎らしい、そんな妹である。

「この世で恐いものは何？四つ挙げて」

「地震、雷、火事、お母さん」

「そういうこと。わかってるじゃない」

この家ではそうなのだった。

「だからお母さんの言うことは聞かないといけないのよ。わかった？」

「だからラーメンは豚骨でうどんは鳥なんばでカレーはチキンなのか」

「そういうことよ」

妹はしれつとして答える。

「ハンバーグには上にバターを乗せてね。コーヒーはアメリカン」

「ついでに野球は阪神か」

「そう、全部決まってるのよ」

「そりゃ俺も巨人は嫌いだ」

彼だけでなく一家全員アンチ巨人である。従って新聞は読売ではない。

「あんなチームはどんな惨めに負ける」

「これに関してはお母さんはあまり関係ないみたいね」

「巨人が負けることは日本にとって非常にいいことだ」

実に正論であるがこのタイミングで言う言葉とはいささか言えないものだった。

「巨人が負けて喜ぶ人間がいる。喜べばそれだけ元気が出る」

「だから皆頑張れると」

「そうそう、そういうことだよ」

こう妹に述べるのだった。

「わかってるじゃないか」

「けれど野球は阪神にはつながらないんじゃないの？」

「勝つても負けても華がある」

やっと話がまた噛み合いだしてきた。

「どんな鮮やかな勝ち方でもどんな惨めな負け方でも絵になる。そ

んなチームは阪神だけだろう?」

「その通り」

やっとお母さんが頷いてきたのだった。

「わかってるじゃない。偉いわ」

「これだけはお母さんに言われるまでもなかったけれどな」

「けれど後は違うのね」

「ああ、食い物に関してはな」

また話が食べ物に戻った。

「とにかくうちの家はそれで決まってるんだな」

「そうそう、明日だけれど」

ここぞというタイミングでまたお母さんが言ってきた。

「明日はオムライスよ」

「おっ、いいね」

お父さんが最初に笑顔で声をあげた。

「それでオムライスはやっぱり御飯をカレーにしてそこから」

「そうよ、カレールーをかけてね」

にこりと笑ってお父さんに応えるお母さんだった。

「それであさってはそれでカレーよ」

「いいねえ、いつも通りのいい流れで」

お父さんは明日のオムライスと明後日のカレーのことを聞いてもう満足していた。どうやらその二つだけで充分の人らしい。

「カレーはチキンでね」

「それで行くわ」

「お兄ちゃんもそれでいいわよね」

「勿論」

ここで声をかけてきた妹に対して答える智哉だった。

「オムライスは特大でな」

「ええ、勿論よ」

最後にお母さんが笑顔で答えた。夜はいつもそんな話をしている。この夜の次の日智哉は純と一緒に学校の食堂で昼食を採っていた。

智哉は鳥なんばうどんと親子丼を食べ純はオムライスを食べていた。
見るべきは純がここで食べているオムライスであつた。しかも彼女
はついでにハンバーグも食べている。かなりの量だつた。

第六章

そのオムライスとハンバーグを見て。智哉はあることに気付いたのだった。

「あれっ、純ちゃんそのオムライス」

「んっ、どうしたの？」

オムライスを食べながら顔をあげてきた。実はずっと食べること
に夢中なのだった。

「何かあるの？」

「カレールーかけてあるんだ」

「そうよ、カレーオムライス」

料理の名前を智哉に答えた。

「ライスもドライカレーよ。そういうオムライスなのよ」

「うちと同じなんだ」

彼はそのことに気付いた。純の話を聞いて。

「それって」

「同じなの」

「うん、うちも実は今日オムライスなんだ」

このことを純にも告げた。

「それで。うちのオムライスは」

「このカレーオムライスなのね」

「そう、そのままなんだよ」

ここでハンバーグを見ると。これもまた。

「このハンバーグだってね」

「ハンバーグも？」

「ほら、これ」

ハンバーグの中央を指差しつつ純に教える。

「これだよ。バター」

「バター？」

「うちの家じゃハンバーグにバターを乗せるんだ。そうやって食べるんだよ」

「そうだったの」

「そうすると美味しいじゃない」

にこりと笑って純にまた言った。

「だから。そうやって食べるんだ」

「智哉君の家でもそうなのね」

「純ちゃんもそうやって食べるんだ」

「ええ」

今度はハンバーグを食べていた。奇麗にフォークとナイフを使いながら答える。

「そうよ。これが一番美味しいから」

「成程ね」

「智哉君だって」

今度は純が智哉に言って来た。

「同じよ。私と」

「純ちゃんと同じって？」

「今鳥なんば食べてるわよね」

「うん」

彼女が最初に指摘してきたのはまずはうどんだった。

「それに親子丼よね」

「この組み合わせがどうかしたの？」

「その組み合わせなのよ」

組み合わせのことをまた指摘するのだった。

「私も親子丼か鳥なんばを食べる時はね。いつもそうやってるじゃない」

「そうだったんだ」

「天麩羅うどんの時は天丼」

天麩羅で揃えている。

「まあこれはあまり食べないけれどね」

「食べるのはやっぱり鳥なんばなんだ」

「そういうこと。智哉君も同じなのね」

「鶏好きだから」

これが理由だったがお母さん仕込みなのはここでは内緒だった。

「だからね」

「私も同じよ」

純はにこりと笑って智哉にまた答えた。

「鶏好きなのよ」

「純ちゃんもなんだ」

「そう、それにカレーが」

今度はカレーだった。これもまた智哉にとっては驚くべきことであつた。

「チキンカレーね、やっぱり」

「一緒だ」

思わず出てしまった言葉である。

「そこまで。一緒なんだ」

「？一緒って？」

「うちの家と一緒にだよ」

うどんをすすりながら純に述べた。

「うちの家でもカレーはチキンカレーなんだよ」

「そうなの」

「しかもね」

話はさらに続く。

「買うハンバーガーはいつもダブルチキンバーガーで」

「そう、ハンバーガーはやっぱりそれね」

これはもう付き合いだして最初でわかっていたことだが。それが自分の家と全く同じだということには今はじめて気付いたのであつた。

「それが一番よ」

「そうそう」

「あとラーメンは」

「豚骨よね」

「当たり前だよ、うちもラーメンは豚骨」

これもわかっていたことだが同じだと気付いたのはやはり今はじめてだった。

「これも同じなんだね」

「そうね。全部同じね」

「少なくとも食べ物はずうだね」

智哉はあらためてこのことを知り驚きを隠せなかった。

「何てことなんだ」

「けれど何で同じなの？」

「うちのお袋の好みなんだ」

今はじめてこのことを純に教えた。

「うちの家じゃさ。お袋が料理は全部取り仕切ってるから」

「それでなのね」

「最近じゃ妹も作ってるけれどね」

しかしであった。

「あいつも。お袋と舌は同じだから」

「じゃあ全部一緒なのね」

「そう、料理は全部一緒」

このことも純に教えた。

「何もかも一緒さ」

「いいわね、それって」

純はここまで話を聞いたうえでにこりと笑って智哉に言ってきた。

「そんなに一緒だとね」

「いいのか？それって」

「だって。全部私の好きな食べ物だし」

彼がまず言うのはここであった。

「かなりいいわね。何でもそんなに好きなのを作ってるなんて」

「全部純ちゃんの好きなものだったんだ」

「そうよ。全部ね」

それをまたにこりと笑って告げた。

「全部好きよ。そこに名前が出たのはね」

「そういえば」

さらに気付いた智哉であった。

第七章

「ダブルチーズバーガーも豚骨ラーメンも」

「ええ」

「どっちも純ちゃん大好きだし」

「それはもう知ってるわよね」

「とくに。お袋も大好きだし、特にラーメンは」

「ラーメンは特に譲れないわ」

やはりこう来た。

「豚骨よ。これが一番よ」

「本当に同じなんだな。そっくり」

「だからそういうの聞いていると」

オムライスもハンバーグも殆ど食べ終えたところでまた智哉に言うてきた。

「行ってみたくなったわ」

「行ってみたくなった？」

「そう、智哉君のお家にね」

こう切り出してきたのであった。

「美味しいものばかりだから。だからよ」

「それでなんだ」

「駄目かしら」

「あつ、いや」

言われると少し返答に困るのであった。

「別にそれは。僕としては」

「いいのね」

「うん、まあ」

少し戸惑いを見せながら純に答えた。

「僕はいいけれど」

「じゃあいいじゃない」

純は無邪気な様子だったが智哉は違っていた。戸惑いをまだ顔に見せている。それでも純の言葉はほぼ一方的に続く。彼が言えないのは気にしていないようだ。

「今度の土曜日ね」

「土曜日に」

「ええ。空いてたわよね」

「まあね」

戸惑いを消せないまま純に答えるしかなかった。完全に彼女のラインが続く。

「それはそうだけれど」

「じゃあ何の問題もなしくてことで」

これまた一方的に純に決められてしまった。後でわかったことだがこの強引さまでもが彼がよく知るある人と一緒なのであった。

「これでね。いいわよね」

「まあいいけれど」

「さっ、今から楽しみね」

もう彼女の中では完全に決まっていた。強引に決めていた。

「智哉君のお家のお料理がね」

「うちのお袋の料理なんだけれど」

「一緒じゃない」

何故彼が困っているのかにも気付いていなかった。天真爛漫なまま。

「家のお料理ってお母さんが作るものだから」

「何かもう」

言っても仕方ないように思えた。もうここまで思えるようになったら観念するしかなかった。そして彼は観念するのであった。

「いいや。じゃあ土曜日ね」

「御願いいね」

「お袋には言っておくから。じゃあね」

「ええ」

これで話が終わった。とりあえず母親に話をしたらこれがまた。随分と明るく返答を返してきたのだ。智哉がうんざりする程の明るさで。

「あら、いいじゃない」

「いいんだ」

「だって。智ちゃんの彼女よ」

明るい笑顔でまずはこのことを告げた。

「悪くないのに決まってるじゃない。むしろ大歓迎よ」

「大歓迎なんだ」

「しかも私の御飯を食べたいっていうのね」

「そうだよ」

憮然として母親に答える。答えながらアメリカンを飲み続けている。

「だから来たいっていうんだ。お母さんの料理が美味しそうだってことで」

「見所があるわね」

今の智哉の報告で火が点いたようであった。さらに。

「その娘。どうやら」

「見所があるんだ」

「私の料理は神様の料理よ」

勝手に自分でそういうことにしているのであった。かなり強引に。

「鉄人とも言っわね」

「今時料理の鉄人なんて言われてもね」

「けれどその通りだから何も言わないの」

やはり強引に話を纏めるお母さんであった。

「わかったらいいわね。さて、と」

「土曜日作るんだ」

「スパゲティにしようかしら」

もうメニューのことまで考えだしていた。

第八章

「その日は。どうかしら」

「別に」

つつけんどんに言葉を返す智哉であった。

「どうでもいいよ。とにかくいいんだね」

「だから。何度も言うけれど」

にこにこしたまま息子に言葉を返すのだった。

「私の料理が食べたいなんて見所のある娘、是非招待しないとね」

「わかったよ。じゃあそういうことでね」

「あちらにも伝えておいて」

今度は純に自分の言葉を伝えるように智哉に告げた。

「是非共つてね。いいわね」

「わかったよ。じゃあね」

「ええ。土曜日のお昼ね」

こうして時間まで決まった。そしてその土曜日まだ困った顔のままの智哉が駅前の本屋の前で純を待っていると。そこに赤とえんじ色の赤系統で揃えた純がやって来た。赤いパーカーに下はえんじ色のロングスカートだ。靴下も赤で靴まで赤だ。首にかけてあるカーディガンはピンクでやはり赤系統で統一させていた。その彼女がやって来たのであった。

「お待たせ」

「うん」

まずはその純の格好を見たのであった。顔もよくメイクされているが見れば口紅まで赤だった。本当に赤系統で何もかもを統一させていた。

あまりにも赤ばかりなのでつい。智哉は純に対して問うのであった。

「赤、そんなに好きだったっけ」

「そうよ、赤好きだから」

相変わらずのにこりとした笑みで智哉に答えてきた。

「だからここぞっていう時はいつも赤で揃えるのよ」

「そうだったんだ」

「智哉君は別にこだわらないのね」

「まあそれはね」

彼は青い上着に黒いズボンだ。これといって統一はされていない普通の格好である。

「それに今日は僕の家だし」

「だからなのね」

「純ちゃんだってそんなに気合入れる必要ないのに」

「それが甘いのよ」

右手の親指をちゅちゅちゅ、といった感じで動かして智哉に告げる。

「それがわかっていないのがね。まだまだ甘いわね」

「甘いんだ」

「彼氏のお母さんのところに行く」

まずはこのことを言う。

「これだけでかなりの勝負なのよ」

「だからなんだ」

「そういうこと。わかったわね」

「まあそう言われると」

「ここでもやや純に強引に押される。」

「そうなんだね」

「そういうことよ。じゃあ」

こうして今回も純のペースで話が進む。

「いざ智哉君のお家へ」

「結局行くんだ」

「勿論」

強引に純に押し切られて彼女を家に招くことになった。この段階

でも迷っていたのだがそれは無駄なことだった。程なくして純を家に連れて行くと。まずは玄関まで迎えに来たお母さんの格好に絶句した。

「何だよその格好」

「おかしい？」

「おかしいも何も」

玄関で純を横に立たせたまま抗議する。

「派手過ぎるだろ。真っ赤なんて」

「赤好きだから」

「理由になつてないよ」

見ればお母さんまで赤尽くしであった。スカーレッドの上着に紅のズボン、エプロンは鮮やかなピンクでありスリッパも真っ赤だ。何処までも赤系統で統一されていた。見ていて目がチカチカする程だ。

「大体何でここで赤なわけ？」

「決まってるでしょ。赤はお洒落な色なのよ」

「お洒落って」

話を聞いていてデジャヴューを覚える智哉であった。

「話がわからないんだけど」

「お客様が来られるじゃない。だから」

「お洒落したってこと？」

「そうよ。これでわかったわね」

「わかったって思う方がおかしいよ」

うんざりとしたような口調で言葉を返してみせた。

「全く。何かって思えば」

「それで」

お母さんの方で話を打ち切ってきて別の話題にしてきた。

「この娘なのね。あんたの横にいるこの娘が」

「はい、智哉君のガールフレンドです」

純の方からにこにここと笑って名乗り出たのであった。

「純といます。宜しく御願います」

「純ちゃんね。いい娘ね」

「いい娘かなあ」

「だって服全部赤じゃない」

お母さんが言うのはそこであつた。今気付いたがお母さんも純も服を赤で統一しているのだ。おかげで目がかなり疲れてしまつ。

「わかつてるじゃない。お洒落が」

「そうですね。赤ですよ」

純もまたにこにこ笑つてお母さんの言葉に応える。

「お洒落する時は」

「そういうこと。あんたにしては珍しくいい娘を選んだこと」

「俺が責められるのかよ」

「当たり前でしょ。あんた何時でもセンス悪いんだから」

ボロクソに言われる智哉であつた。しかも自分の家の玄関でお母さんに。

「そのあんたがどうして。こんないい娘を選んだのよ」

「それはまあ」

「智哉君の方から声をかけてきたんですよ」

またしても純がここぞというタイミングで述べる。

第九章

「デートにも誘ってくれたし」

「そうだったの。あんたがねえ」

「何か疑わしいって目だな」

本当にお母さんは今智哉をそんな目で見ていた。何故か純に対するよりも彼に対する方がきついのが彼にとっては不思議だった。それに対して純には至って優しい。優しいどころかまるで何年どころか生まれてから知っているような接し方なのであった。

「俺がそんなに」

「はい、話はここまで」

またしても強引に決められてしまった。

「あがりなさい。もうスパゲティできるから」

「あつ、スパゲティなんですか」

「そうよ。スパゲティにピザ」

ピザまであるという。智哉はこれは初耳だった。

「あるから。さあ早く」

「わかりました。じゃあ智哉君」

純の方から明るく誘ってきたのであった。本当に何処までもお母さんとの純のペースで話が進んでいっていた。

「あがりましょう」

「あがりましょうってここ俺の家なんだけれど」

「あれこれ言わない」

またお母さんの声が智哉にかかる。

「あがつて早く食べなさい。いいわね」

「わかったよ。それじゃあ」

こうして自分の家なのに何故か肩身が狭くそのうえあれこれ言われながらあがる智哉であった。彼と純が向かい合ってテーブルに座るとすぐに。そのスパゲティとピザが置かれたのだった。

「あつ、このスパゲティって」

「どうかしら」

お母さんは声をあげる純の側に来て誇らしげに微笑んでみせた。

「ネーロ。烏賊のスミを使ったスパゲティ」

見ればスパゲティは真つ黒だった。さながらインクをかけたようである。そこにスライスしたトマトと烏賊の切り身、それにガーリックがある。その三つを炒めてその上に烏賊スミをかけて熱しそれから茹でたパスタにその烏賊スミソースをかけたものである。

「これははじめてかしら」

「いえ」

だがここで。純はまたしても満面の笑顔でお母さんに応えるのであった。しかも同時にピザも見ている。ピザはベーコンと海老、それに貝を乗せたシーフードメインのピザである。お母さんの好きなスパゲティとピザはこの二つなのである。

「私このスパゲティ好きなんです」

「あらっ」

「何と」

今の純の言葉を聞いてお母さんも智哉も驚きの声をあげた。お母さんは喜びの声であり智哉は純粹に驚きの声であった。これだけの違いがここでもあった。

「好きなの。このスパゲティが」

「家じゃいつもこれです」

この言葉を聞いてそれこそ顎が外れんばかりに驚く智哉であった。まさかと思ったがスパゲティまで。偶然にしてはあまりにも出来過ぎであった。

「ピザも。シーフードピザが好きで」

「そうだったの」

「どちらもそのまま私の家でも食べます」

何とこうなのだった。

「まさかそれがここでも出るなんて。何て言えばいいか」

「じゃあどちらも食べられるわね」

「はいっ」

その満面の笑顔でお母さんに応える純であった。

「それで食べる前にはチーズとタバスコをかけて」

「それまで同じなのか」

智哉はさらに驚くことになった。顎が外れそうになるのを何とかするのにも必死な程であった。

「何てこった」

「いいわね。さらにいいわ」

その彼の目の前ではお母さんがこれまでにここにこととしていた。本当に嬉しくて仕方ないといった顔で純の隣に立っている。

「あんた、本当にいい娘を見つけてきたわね」

「いい娘って………んっ!？」

そしてここで気付いた。にこにこと笑う二人の顔を同時に目の中に入れて。何とそこにいるのはそっくりそのまま同じ顔をした二人だったのだ。こちらの方が親子ではないのかと思える程そっくりの顔が二つ彼の目の中に入ったのであった。

その二つの顔を見てわかった。何故先程お母さんの赤い服を見てデジャヴューを覚えたか。それに時々純を見て何か前に見たような気になったのか。最初に何故純に声をかけたのか。全てがわかったのだった。

（俺はマザコンだったんだな）

心の中でまずこう呟いた。

（だからこの娘に声をかけたんだ）

そういうことだった。何から何までそっくりなこの娘に。そうだったのだ。それがわかった彼は。どういうわけか心の奥底から笑えて仕方がなかった。

第十章

「んっ！？どうしたの智哉君」

「そんなに笑って」

その二人が彼が笑っているのを見て声をかけてきた。

「何かあったの？」

「おかしいの？何か」

「いや、別に」

だが彼はその笑顔のまま答えなかったのだった。

「何もないよ」

「そう、何もないの」

「あからさまに何かありそうだけれど」

そのお互いそっくりな顔で彼に言うのであった。

「まあいいわ。じゃあ純ちゃん」

「はい」

「スパゲティとピザの次はね」

「ええ」

「デザートだけれど」

話は今度はデザートに移っていた。やはりこれは欠かせない。

「イタリア料理のデザートはわかるわね」

「ジェラートですね」

「そう、それよ」

にこにこ笑って純に告げる。

「それなのよ。そのジェラートはね」

「バニラですね」

「その通り。やっぱり一緒ね」

「本当に一緒だな」

智哉は話を聞いてまた思うのだった。

「何処までも。親娘みたいだな」

「もう冷やしてあるからね」

「じゃあスパゲティとピザを食べ終えたらすぐに」

「紅茶も用意してあるから」

「紅茶といえばだ」

ここから先ももう完全にわかってしまっている智哉であった。彼は今の二人のやり取りから冗談抜きで純は母親の血縁者ではないかと思っていた。

「アイステイーで」

「冷やしてあるから」

やはりこう来た。

「それとミルクでね」

「そうですね。やっぱり紅茶はそれですよね」

純はアイスマルクティーと聞いてまた顔を綻ばす。

「アイスマルクティーですよ、やっぱり」

「熱くてもミルクティーよね」

「勿論ですよ」

「やっぱりな」

やはり彼の予想通りなのであった。紅茶も。

「そうだったか」

「食べ終わってからテレビ観ながら食べましょう」

「テレビですか」

「だって。今日は」

ここでお母さんの顔が少し変わった。食べ物とは別のものを楽しもうという顔であった。

「野球の試合があるから」

「野球といえはやっぱり」

楽しみながら語る純であった。その表情はやはりお母さんと同じものだ。よく見れば顔に皺があるなし程度の差で本当に同じ顔なのであった。

「阪神ですよ」

「そうそう。野球は阪神」

野球まで同じなのだった。

「やっぱりね。虎よね虎」

「虎が巨人を倒す」

阪神ファンの最高の喜びである。

「それが一番よね。純ちゃんもわかってるじゃない」

「何が史上最強打線ですか」

確かに滑稽な名前の打線である。荒唐無稽であると言ってもいい。そのわりにはつながりがなくホームランだけでアベレージヒッターの重要性を把握しておらず機動力は皆無だ。おまけに守備はお粗末でチームプレイも全く考慮していない。こうした打線を良識ある人間は史上最強などとは決して呼びはしない。強いて言うのならそれは『自称』最強打線である。実に滑稽であり愚劣な打線の名前であるがこれが世に出る不思議現象が起こすのも日本なのだ。

「全然駄目ですよ、あんなの」

「巨人は巨人よ」

お母さんの嫌いなものはまず巨人なのだ。

「センスなんてないのよ。名前にも」

「そうですね。それに対して我が阪神は」

「ダイナマイト打線」

阪神タイガースというチームの代名詞である。終戦直後に名付けられた名前である。碌に食べ物もない時代に阪神は打ちまくった。そしてこの名前は昭和六十年の優勝の時にも復活している。まさに阪神そのものといってもいいのがこのダイナマイト打線という名前なのだ。

「あとJFK」

「いいネーミングですよ」

「巨人の偽物の打線なんかとは違うわ」

この言葉はその通りであった。わからないのは卑しい顔立ちをして巨人ばかり褒めしやもじを持って喚き散らし人様の御飯を漁るだ

けの無芸大食の自称落語家だけである。世の中知能も人格も卑しいことこのうえない輩もいるということである。これもまた怪奇現象であろうか。

「あんなものとはね」

「阪神は打線が本当じゃないですしね」

「流石ね」

今の言葉もお母さんの心の琴線に触れるものであった。

「そうよ、阪神の真髄は」

「ピッチャーですね」

これがわかつているかわかっていないかで本当の阪神ファンかそうでないかがわかるという。阪神は伝統的にどんなチームかを。

「やっぱり」

「そう、ピッチャーよ」

お母さんの目が光った。

第十一章

「若林も小山もいたし」

「はい」

いきなりかなり古い。

「江夏村山」

「中継ぎ課」

不振期に阪神を支えた中次ぎ陣をこう呼んでいたのだ。どれだけ不振であった時もピッチャーには滅多に困ってこなかったのである。

「そういうことよ。甲子園で憎き巨人を打ち負かす」

「阪神のピッチャーがですね」

「いいわねえ。純ちゃん」

純のことをさらに気に入ったようであった。笑みがさらに明るいものとなっていた。

「増々気に入ったわ。いいわ」

「有り難うございます」

「それじゃあ。丁度スパゲティもピザも食べ終わっしたし」

どちらも量はかなりあったがあつという間であった。食べる量が多いのもまた二人は実によく似ているようであった。

「それじゃあ。いよいよ」

「はい」

「ジェラートね」

「もう野球はじまってますよね」

純は自分の腕時計を見た。左手にあるそれも赤くカラーリングされている。時計の色までお母さんの時計と同じだった。実は特別にカラーリングしているのだ。

「いえ、そろそろでしょうか」

「そうですね、そろそろね」

お母さんも時計を見る。その動きまでもが一緒であった。

「はじまるわね」

「食器をなおして」

「ああ、いいわよ」

純がなおそうとするのは止めた。

「智哉にやらせるから」

「俺かよ」

「料理は女の子の仕事よ」

これはただ単にお母さんが料理好きだから言っているだけである。しかしこの家ではお母さんの言葉がそのまま法律になるからそうなっているのだった。

「だったら食器をなおすのは」

「男の仕事だっていうのか」

「いつも言ってるでしょ」

智哉に対してはつつけんどんなお母さんであった。

「このことは。違うかしら」

「それはそうだけれどさ」

「だったら文句はないわね」

有無を言わせない口調であった。

「いつも通りだしね」

「まあね。それじゃあ」

「何か私の家と同じなんですけれど」

ここで純はまた言うのであった。

「男の人が食器をなおすのって」

「これもそうなのね」

「はい、私の家はお父さんと弟ですけれど」

何処となく智哉の家と似ていると彼は思った。妹が弟になったただけで。つまり男女の兄弟順が入れ替わっただけなのであろう。

「それでも。そこは」

「ついでに洗うのもね」

「はい、そうです」

これで何度目かわからないがこれまた同じなのであった。

「お父さんと弟の仕事なんです、うちは」

「うちもよ。その通りよね」

お母さんの満面の笑みは続く。それと共に言葉もであった。

「女が料理をしたら男が食器を洗う」

「その通りです」

「昔は男子厨房に入らずって言ったそうだけれどな」

智哉は二人に聞こえないようにポツリと言った。思えば古臭い言葉であり最早死語であるがそれでもふと思いついたのである。この考えについては彼も古臭いうえにそもそも根本から間違っていると思うがそれよりも二人のこのかなり勝手とも思える考えに困っていたのである。

「同じか」

続いてこう思った。

「結局俺は。お母さんの若いのを選んだのかな」

苦笑いにもなった。しかしそれでも何故かそれでもいいと思えるのだった。

「まあいいか」

それが言葉にも出たのだった。

「一緒なら一緒に。それで」

あらためて二人の顔を見る。その顔はやはり。

「やっぱり奇麗で可愛いしな。もうそれでいいか」

何故純に声をかけたのかも彼女が好きなのかもわかった。わかって嫌になったのではなくむしろ余計に純が好きになった。そんな自分に苦笑いを浮かべつつ二人を見ているのだった。目の前で賑やかに話しながら同じ顔で笑い合い同じジェラートを食べる二人を見て彼も笑うのであった。

2
0
0
8
.
8
.
1
9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8399f/>

面影

2010年10月8日15時36分発行